

## 学位論文

### 「奄美ブラジル移民史研究 -移民名簿とオーラルヒストリーを中心に-」(要旨)

加藤 里織

本論文は、奄美地域からブラジルへ移民した人びとに注目し、奄美ブラジル移民史の構築を試みたものである。移民研究の基礎資料である移民名簿をもとに移民全体数を明らかにしたのち、ブラジルでフィールドワークを行い、奄美出身者がブラジルにおいて確立／育成した「奄美」アイデンティティの存在を明らかにした。また、このような「奄美」アイデンティティの二世以降への継承と母村への還流についても考察した。

論文の構成は以下の通りである。最後に参考文献と図表一覧、それから付録資料として、資料目録、年表、奄美ブラジル移民名簿を付した。

序章 問題の所在と本研究の構成(新稿)

第一章 移民名簿にみる奄美ブラジル移民

初出『『伯刺西爾行移民名簿』から見る、奄美ブラジル移民』(『歴史民俗資料学研究』第25号 神奈川大学歴史民俗資料学研究科紀要 2020年)

第二章 奄美の「移民村」宇検村

初出「奄美・宇検村ブラジル移民概史-移民名簿とオーラルヒストリーを中心に-」『ブラジル日本人入植地の常民文化』(神奈川大学常民文化研究所 共同研究報告書「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究」2021年)

第三章 ブラジルにおける奄美郷友会

初出「ブラジルにおける奄美系郷友会の研究」(『神奈川大学 非文字資料研究』第19号 神奈川大学日本常民文化研究所 2020年)

第四章 「奄美」として生きるブラジル移民(新稿)

第五章 「COMUNIDADE AMAMI(コムニダーデ・アマミ)」

初出「ブラジル奄美移民のアイデンティティについての一考察 -COMUNIDADE AMAMIによる「UNDOKAI(運動会)」と事例に-」(『神奈川大学 非文字資料研究』第18号 神奈川大学日本常民文化研究所 2019年)

終章 本研究の総括と展望(新稿)

参考文献

図表一覧

付録資料 資料目録、奄美ブラジル移民年表、奄美ブラジル移民名簿

## 序章 問題の所在と本研究の構成

序章では、本論文の研究目的を示したのち、ブラジル日本移民研究から奄美移民研究までの研究史と移民資料についてひと通り整理した。日本におけるブラジル移民研究は、近年総体的に研

究が減少傾向にあるなか、地域を限定した個別研究は続けられていたが、奄美という地域に焦点を当てたブラジル移民研究の蓄積はほとんどない。また、近年では、日本本土と沖縄の間に位置する奄美の人びとが複雑なアイデンティティを形成していることに関心が高まってきている。本章では、このような奄美からのブラジル移民に着目する意味と意義について述べた。また、研究方法としてブラジル・サンパウロ州でのフィールドワークを中心にしていることの理由について説明を加えた。

## 第一章 移民名簿にみる奄美ブラジル移民

第一章では、従来の研究史で基礎資料とされてきた移民名簿の悉皆的な整理分析を行い、奄美ブラジル移民の詳細な人数を明らかにした。本章で用いた移民名簿は、従来の研究で基礎資料とされてきた『海外移住者名簿 1965』に加えて、戦前移民では移民会社作成の移民船乗船名簿『伯刺西爾行移民名簿』（原簿）を、戦後移民については海外移住事業団作成の『戦後海外移住者名簿』を合わせて検討した。一方で、ブラジルでのフィールドワークを通じて新たに見つかった「名簿に記載のない移民」を含めた「奄美ブラジル移民名簿」を独自に作成した。この名簿の悉皆的調査の結果、これまでの研究より戦前は8世帯25人、戦後は10世帯24人、戦前・戦後を通じて18世帯29人の新たな奄美移民を確認した。これによって奄美ブラジル移民数は、戦前は128世帯723人、戦後は57世帯198人、総数185世帯921人となった。また、従来奄美のブラジル移民は1918年から始まったとされてきたが、1912年にブラジルへ渡った榎常孝の存在を明らかにした。

## 第二章 奄美の「移民村」宇検村

第二章では、奄美で最も移民を送出した「移民村」である宇検村に注目し、宇検村から移民した三家族に聞き取りを行った。聞き取りを行ったのは、「戦前移民」「戦前移民の戦後再渡航」「戦後の呼寄せ移民」の三家族である。この三家族のファミリー／ライフ・ヒストリーから、奄美では「食べる物には困らない」生活を送っていた「中規模農家」が「より良い生活」を求めて移民に至った経緯や、ブラジルで入植後早々に離農しホテル兼食堂の経営をする者がいたことなど、多様な移民の生活実態が明らかになった。また、家庭ではブラジル語（ポルトガル語）や日本語ではなく「オオシマ語」が使用されており、奄美出身の一世が健在の時代には「シマ唄」や「サンシン」にも慣れ親しんでいたが、二世以降の世代には奄美特有の言葉や文化継承が途絶えてしまったことも明らかにした。

## 第三章 ブラジルにおける奄美郷友会

第三章では、奄美の人びとが移住した先での生活を構築するために組織する「郷友会」に注目し、ブラジルで結成された「ブラジル奄美会」を事例に、その成立過程と、そこで行われていた文化継承の状況、そして郷友会の分裂から解散までの終焉について考察した。ブラジルでは、1962年に「奄美同志会」が発足し、のちに「ブラジル奄美会」へと名称を変え、自前の会館を建てるなど精力的な郷友会活動が行われていた。しかし、郷友会の第一目的が「親睦融和」から「会館建設」へと変更され、強引な建設計画が推し進められたことにより、郷友会は分裂し2002年

に解散となった。

#### 第四章 「奄美」として生きるブラジル移民（新稿）

第四章では、ブラジルで生まれた「奄美」アイデンティティが、奄美会解散後に、奄美の人びとの中でどのように表出されているのか、いくつかの事例を紹介しながら、その特徴について考察した。奄美の人びとは故郷の奄美では各自の「生まれジマ（出身村、地域共同体）」にアイデンティティを持っていたが、ブラジル移民後には、広く「奄美」という形で表現するようになっていた。ブラジルで新たに形成された「奄美」というアイデンティティは、奄美会解散後も、個人手記や自社屋号などの場で表現されていた。一方で、この「奄美」アイデンティティは、移民の一時帰国などを通じて故郷の奄美側へ還流している。

#### 第五章 「COMUNIDADE AMAMI(コムニダーデ・アマミ)」

第五章では、サンパウロ市東部ヴィラ・カホン地区に住む奄美出身者とその子弟の団体「コムニダーデ・アマミ」が開催する「運動会」を事例に、二世以降の世代に継承された「奄美」アイデンティティについて考察した。「COMUNIDADE AMAMI(コムニダーデ・アマミ)」では、年に一度開催する運動会で、自分たちを表すシンボルとして「奄美」という「言葉／漢字」を用いて揃いのTシャツ（ユニフォーム）を作成／着用し、「奄美／アマミ」アイデンティティの確認を行っている。

#### 終章 本研究の総括と展望（新稿）

各章の論点は上述の通りである。これらをふまえて終章では総括を行い、以下の四点を本研究の成果として挙げた。(1) 移民研究の基礎資料である移民名簿の悉皆調査を通じて、奄美ブラジル移民数が、戦前は128世帯723人、戦後は57世帯198人、総数185世帯921人であることを明らかにした。(2) 移民のオーラルヒストリーや参与観察を通じて、奄美ブラジル移民の生活実態の一部を明らかにした。(3) 新聞・雑誌記事の整理を行い、ブラジル奄美会設立と解散それに会館建設の詳細な経緯を明らかにした。(4) ブラジルで形成された「奄美」アイデンティティの存在を確認し、二世以降の世代が「奄美」という言葉自体をシンボルとして自らのアイデンティティにしていたことも明らかにした。

本研究の成果をふまえたうえで、今後の課題として、(1) ブラジルの「奄美」アイデンティティの「奄美」の踏み込んだ解明、(2) 移民名簿をもとにした島ごと、市町村ごとの個別研究と奄美での調査についての二点を挙げて結びとした。